

忠勝公武功吟味之書

武功吟味

覚

一 天下の武功吟味ハ元弘年中(一一三三～一一三三)に楠河内守橘の正成奉敕て

穿鑿し、一卷の書を書たておきしを(二四六九～八七)文明の頃公方常

徳院源の義尚公是を秘蔵し給、細川右京大夫源の政元に

被仰付、武弁の才有輩を集、異国本朝の正しき理を書

添末代迄其法を守り道に障なき様にと思召書置給し

を年経て後にいかゞして落ちりけん、三河の国の住人夏

目五郎兵衛藤原の忠氏といふ人は是を所持す、其頃御祖父清

康武功の吟味を専とし給ふゆへ、是を被召上御秘蔵有

御所様迄相伝りしを大須賀五郎左衛門尉平の康高、酒井

左衛門尉源の忠次に被仰談御軍法の内へ被入し也、秀忠公未
黄門にて御座の時分被遣しを、忠勝も御前に罷有て拝見仕
端々覚候ゆへかの法を本に立私の所存を加書て

一 凡軍の習は、敵味方数万の軍兵を催し天下分目の合戦

をなすといへとも虎口鏖場(のぞむ)に臨兵は敵みかたともに百人に

不過物也、いはんや真先にかぶりつゝ鏖を合勝負を決する

兵多して七八人に不過、是皆古よりの証拠度々有事也

故に云、敵未かた何万人もあれ、備面へ出ル兵は百人敵と鎗を

合する兵ハ五人、敵を突崩す鎗は三人に極ル也と云伝也、其外

ハ何万人もあれ後凍(陣)につかへ居て虎口の勝負を守りいる

物也、去程に数万人の大軍も二三人の鎧先に突崩れ或ハ
鎧の四人五人の勝負を以て、敵未^(味)方数万人の勝負と成るハ
軍有度ことに有事也、如此の道理を数度の合戦に不逢
は其習ハ不可知、されは数万人の中より抽之、鎧を合勝負を
始る志の至て剛きを称美して、一身のかせきには鎧を
合る第一とする也、惣而働の強きをほめて鎧と呼事ハ
古より鎧ほと強きかせきなきゆへに末代の諺さにて如此
いふ也、凡鎧といふ其品八ヶ条有、一番鎧・二番鎧・小返し
鎧・大返し鎧・つけ入の鎧・城責の鎧・籠城の鎧・請止の
鎧是也、指つゝきたる働亦四ヶ条有、一番のり・乗込鎧^{ヤリ}・

脇の太刀鎗・脇の弓是也、其外高名に七ヶ条有、鎗下の高名・鎗場の高名・退口の高名・組討の高名・崩涯の高名・場中の高名是也、右十八ヶ条の場数ハ義尚公よりの定如此、乍去此内ニも志を吟味する事第一也、たとへは敵未方互に数万の大軍を催し、田土江推出備を立、合戦有に勝負の始る前かた二町三町に責寄セ弓鉄砲のセり合初りつゝ、次□^(第)くに近づき敵未方互に杉なりに成り已にはや卅間四拾間の内外に引請、矢軍に成ては敵未方ともに手負死人将棋たをしのことくに重りて見る内に残りすくなに討るゝ故、両方共に弱ものは

二のあしをふみ強き者も胃をかたふけ漸ふみこたへる物也、其時一備二千三千の中より三人四人の兵抽てつゝ備面江すゝみ、出ふり見事にふみこたへ(おく)後る者をいさめ前後左右を下知して始終堅固にこたへるハ其功一度にても数度に向処なれハ是をほめて武弁とは申也、如此に働兵ハ後迄こたへる者成るがゆへ必鎗をする者也、乍去其品により敵つかへすして崩るゝか亦ハ其兵矢鎗(鉄)砲の手を負かして後陳(陣)江退て鎗不合ハ其志は鎗を合たる同前也、其子細ハ人の進かたくこらへかたき場を人先江出抽てかせくハ敵見かた打合ハ鎗を

可合事ハ必定なる故也、去程に城江取よせるにも
野合にてもかゝる時にて五百・千人に抽(ぬきん)てる侍をは和
漢共に古より英雄と号して武士の棟梁といふなり、
一度の鏖をほむるも千万人の進得ぬ所を抽て進む
志をこそ誉とは云也、惣而鏖といふハかゝ口退口
に不寄敵未方の諸軍を五間も七間もはなれて進
み出両軍の見物の前にてまきれもなく合こと鎗とハ
いふ也、たとへ鏖合たりと云とも敵未方の先勢已(ほこさ)に鋒キ
交時に覃(および)一足二足ふみ出したゝき合か亦退口なん
との鎗も已に敵に鏖たけに追ひ着れ一足二足ふミ

戻て合するハ鏑とは不云、敵の未不近着其間へだゝりたる
(未だ近着かざる)
時味方の同勢の中より抽て出、六間も七間も跡ゑ取て
もと(戻)しふミこたへ敵の追來を待うけてまきれ
もなく合るを鏑とはいふ也、敵未方推合るときに
およひて分も不見ハ鏑とは不云物也

一番鏑の事

一 弓鉄砲の迫合終て敵みかた已に十七八間の内外に近付
鉄砲を打事も不成程に引請ては皆人ふるひおのゝ
きて眼すわり無念無想に成り、他事を忘れ互に

念仏を唱へ二の足を踏にらみ合てかゝりかぬる物也、其
時敵みかたの向居虎口前の鉾におゐて剛の兵只一人みかた
千二千の中より抽てつゝ真先に^{カケ}走出、大敵の待請
タル鎗前に面もふらすかゞりつゞ鎗をうち込合戦を
初るを一本の鑓と称美して一番鑓といふ、敵より相手
一人出むかふて両方の真中にて晴なる鑓合ハ猶以いさ
きよき鑓なり、亦敵つかへすして鎗不合とも是を一番
鑓といふ、但シケ様の場にてハ一人にかきらす七八人にても
其備を出離れ真先にすゝみ出鑓を合ハ少の遅速
少の一・二を不諭、五人ならハ五人、七人ならハ七人ともに鑓合る

といふ、惣而一番鑓をいふハ敵みかたの推合る鋒にて只一人真先に進みて鑓を打こミ合戦を初るをいふ、故に一番にかゝるといへとも二人とも進みて鑓を合るをは一番鑓とは不云、只鎗と計云物也、如此敵みかたの押合る鋒にて合鎗ハ壱人ハ不_レ及_レ云、五六人にてても七八人にてても是を鑓と号し本の鑓と云也、五六人・七八人とももの鑓ハ少の遅速をつけ難きゆへ一番二番と不云候、乍去一間二間ともおそく有をは一番二番とは分る也、是ハ鎗合ちそくをは不_レ論、只備を走出ル所の遅速を以、一番二番を分るなり勿論一番に進か一人ならハ其一人を一番鎗とし

てつゝく兵は五人六人有とも押合て二番といふ、若
一番に進か三人とも有ハ其輩を鎗といふつゝく兵は
鎗とは不云、乍去一番にすゝむ兵か敵に突かゑされて
敗軍するに続く兵か入代てしかも二人三人見も敵を
さゝへ止始終ふみこたえ鎗を仕り惣軍を引付勝負
をけつせは是を鎗といふへし、一番に進みて突返
して引退たる兵ハ一人見も二人にてもあれ又ハ鎗をも
合から鎗とはいわす、乍去一番にかゝりたる兵共
大敵ゆへ突立られつゝ一足不堪故軍するといへとも
足なみ見遠く(逃げ)にけ得す返合／＼ふり能払退

にして二番につゝく兵とてらし合取て戻し、亦鎗を合は鎗といふ、但壱番二番押込て只鎗を合ると云其功、押合て同前也、子細ハ二番につゝく兵ハ一番に進む兵を目付、それを便とする志次なれば一番の兵と入代りて鎗をするとも其意地ハおとれり、亦二番に進む兵ハ諸人に勝て抽るといへとも突かへされて二番の兵のちからを得て返合は一番に進む、心さしハ尤なれとも其功少し故に一番二番押込て其功同前也、但其場の品により一番ハ一番、
二番ハ二番と進る事も有へし、惣而両軍の鋒

(ほこさ)

き本の鎧場にて合るとも七八人より人多ハ鎧とは
不云、惣かゝりといふ、子細ハ互にかゝりかねてためらふ
前を抽て諸人に勝れて進み出る志こそ鎧なれ、大
勢すゝむハ何をほまれにとせん、ゆへに二人三人にても
其かゝり口混乱して見分難くハ鎧とは不云、五
六人、七八人にてモ両方の鋒にておのれか備をはな
れて進み五間も八間も抽て紛もなく鎧を打込
を本の鎧といふ也

二番鎧の事

一 已に一番鎧の一人すゝむに押つゝき亦一人の兵懸り
つゝ一番鎧合所へつゝいて鎧を打込を二番鎧といふ、
五六人・七八人にてても一番につゝきて己か備を走り
出同勢を離て走りかゝり鎧を打込ハ二番鎧と
いふ、少の不同を不諭、五人にてても七人にてても押合て
二番鎧といふ、六七八人より多くハ鎧と不云惣かゝりと
いふ、其理一番鎧の内に在り

大返の鎧之事

一 未かた敗軍におよひて敵に手火とく付らるゝ時未方

の兵只一人取て返し、面もふらすふみこたへ追来ル大敵を支止惣軍をもり返て合戦を初めきおひかゝりくる敵を突返し大に勝を得さするを大返し
の鑓とも、もり返しの鑓ともいふ也、是をまた一本の鑓とほめて其功一番鎗に勝る也、如此の場にてハ一人に不限五六人・七八人迄も皆押合て鎗といふ、五六人・七八人有とも其一番に返し合る兵を第一にほむる也、乍去退口ハかゝり口と違ひ味方ハ我先へと引退、敵ハ氣に乗て追重る故一旦おひ返してもまたもりかへしてかゝりつゝしたるくかいかゝるは骨を折事

かゝり軍より十倍セリ、故に一番にかへし合るをも後にかへし合るも押合て五人ならば五人ともに鎗といふ、乍去先一番に帰すをさしてほまれとする也

小返の鎗の事

一 みかた敗軍して敵に付られ既に間近く追詰来る時、只老人取て返しふみこたへ鎗を合せ追而くる敵を支へ、其間に未かたを安く引取するを小返しの鎗といふ、敵しらんて鎗不合とも是を

鎧といふ、但ケ様の場にては一人に不限五六人・七八人
にても返し合て鎧を合セは、五人ならハ五人ともに
鎧といふ、況や跡に引さかり節々返し合て敵を
突かへしてハ退、亦敵追来ハ取て返し数度の鎧を合
は猶以古今稀なる強き鎧也、その度数を算て
向度の鎧といふ、たとへハ幾人返し合るとも其一
番に返す兵幾度鎧合とも一度も不洩るを
不功、後迄勤るを第一とする也、一番に返すといふ
ともつゝく兵に渡りて引退か、またハ漸一度手に
逢脇もふらす引退をハ鎧は合共一番小返し

たりともさのみほめす、小返といふハ味方の惣人数ハ不返たゝ五六人・七八人の兵計返て鎗を合セ其隙にみかたを引取するをいふ、大返といふハ右にいふ通りに殿(しんがり)の五六人の兵かへし合てふミこたへ惣軍をもりかへし鎗を合セ合戦をはしめ大敵を追返すを云也、大返し小返しに不限人すくなにて返す程を手柄といふ也、況や一人にて返し合て味方のあやうきを助、あまつさへ数度の鎗を合セ或ハよき仕場にてふみこたへ大返しの鎗を合セ大敵をなひけハ鎗の根本と

するなり

請止の鎗の事

一 味方ハ待軍にて扣るに、敵軍備を崩し真黒に突てかゝる時は何ほと剛の者にてもしらんで張出る者ハなきもの也、其時味方の備より二人三人にても七八人にてても進みつゝ己か備より二間三間四間五間張出留^{テカ}敵のかゝるを待うけて鎗を合るを請止の鎗といふ、七八人迄も鎗をゆるすそれより多は鎗とはいわす其理り前にあり、亦先手追立られ敗軍するに二

の備の兵とも五人六人にてても己か備を二間も三間も張
出て敵の勢かゝりて我先備を追立二の備へかゝるを
待請て鎧を合せ合戦を初を亦呼て請止の鎧といふ、
七八人にてても己か備より二間も三間も張出一面に立双て
晴なる鎧合ハ鎧とめす、乍去待請すして我先備を
追立敵中江二の備より鎧を入は横合と是を名つけ
鎧を合するとは不云、亦敵の大勢引取をみかたの
強者弐人三人にて惣軍より先立フイて追行深入して
敵に大返しにかへさるゝ時、かの兵共二人三人にてても追
行たる仕場を少も不去ふミこたへて鎧を合るを

また名付て大返し請止の鑓といふ、若敵に返されてこ
らへす味方へ逃かへるとて逃なからたゝき合たるハ鑓とは
不云、乍去ふみこたへて鑓合とも四五人より多ハ鑓とは不
云、是ハ敵退き口にておくれ、味方ハ勝て勢ひつゝ
おひ行場なるゆへ四五人より多も志し詮なし
右已上三段の鑓は皆請止の鎗也

城攻の鑓の事

一 味方大軍にて敵城を取巻に敵か門を開て突て
出る時門前へ取詰たる吟^(ママ)方千二千の備の中より

二人三人の兵とも真先へ張出、敵の出るを待請鎧を合るを又鎧といふ、其吟味野合の論議に同じ、亦味方の勢敵の出るに白みて見崩にしさるに其中より二三人少も不退仕場をかたくふみこたへて出る敵を待請て鎧合ハ一入強鎗なり、又敵の出るを見て寄手能(よき)の兵三人四人抽て相かゝりにかゝつて鎗合は其遅速を分一番鎧二番鎧を定事野合の鎧に同じ、敵か門を開て待請にみかたの兵二人三人にて諸人に抽て門内江かけ入鎧合も同前に一二をわけ鎗といふ事野合同前也

籠城の鎧の事

一 味方籠城の時、城中より突て出るにも一人真先に抽て出るを一番鎧とし、続兵抽て進むを二番鎧といふ
其次初野合(第)に同前也、節々突て出るに度毎に其兵真先に出ハ其度数を以幾度の一番鎧といふ、大手からめ手ともに突て出るに両口にて鎧あらハ大手にてハ誰一番鎧、誰二番鎧、搦手にてハ誰一番鎧、誰二番鎧といふ、寄手にても分る事是同前也、大手にて某(なにがし)からめ手にて誰鎧仕るといふ也

付入の鑓の事

一 味方の軍勢敵の城を取巻時、敵備を出し、或ハセリ合、或ハ夜討夜込に出て城中江引取所を味方の剛者二三人にても諸人に先立て付入に追込に敵の内方四五人にてても七八人にてても取てかへし是を込出さんとかゝる時味方二三人の兵ともおい込たる場を不去ふミこたゑ合るを付入の鎗といふ、敵味方ともに強き鑓なり野合にて大返しの鑓請止の鎗と同前の鑓也、五人より多く付入に追込てたとへ鑓合とも鑓とは不云、是は追行場なる故如此城方は退口なれ者五六人といふとも

返し合セ大敵の付入を突出たらハ強き鎧なり

鎧心持の事

一 或ハ高みひきミ又ハ溝堀をへたてゝ押合セつゝ互に
快く不働によりセいてなけ突にしたりとも其場鎧場な
らハ鎧といふ、惣而右にしるす所の八ヶ条の鎧場ならハ
鎧の先ハ不合とも亦ハ其間五間七間隔りたりとも走
出て鎧を振廻しても鎧といふなり、其外のハたとへ血の
川を流すほと突合たり共鎧とは不云、たゝ鎧セり
合といふ、亦たとへ持所の道具は長刀にても其働

の場鑑場ならハ鑑をしたるといふ、扱また武功の吟味も志しを賞翫するを第一として第二には亦功を成す所を専に心得へし、たとへは一番に刀を持って進むは其志長道具を持ってかゝるより強になれとも刀ハ大てきを取ひしく事鑑長刀の業にハ中々およハさるゆへに古より一番太刀といふ事なし、又鑑・長刀ハ三人四人をも合手としたゝきたて進む時ハ大敵を突崩事利コトハリニテカにて功をなす所速なるを以て鎗をしたると是をいふ、勿論刀にて一番にかゝり亦ハ取て返しなどするを誉と不言には非(あらず)すたゝ其志しを感して

先かけ亦ハ退口の太刀討といふ、品により鎧にも可成又
弓鉄砲も拾人弍拾人射殺すをも不誉、只肝要の所を
一筋の矢一放の鉄砲を以て支へつゝ五万三万の大敵
をも屈り所を以てほまれといふ也、万事如此の所を
能々吟味する事打要也^(肝)

鎧場度数の事

一 惣て軍の法にて敵味方誰合^{推カ}セ追つ返しつ戦て勝
負を付とつと追崩したるを一仕場居といふ也、亦
城攻の時も突て出推合セつゝ込出し追出して末

にさつと引分れつゝ寄手ハ陣へ城の兵ハ城へたかい（ハカ）
に引取たるを一仕場居といふ、一仕場居の中にて五間
六間進み退き追つかへしつ戦はセり合といふ、鏖とハ
不言、其押合てかゝる時の鏖始をいふ也、押合て後テ
爰かしこにて込つ込れは鏖（三）にてたゝき合は鏖セり
合とて鏖の度数にセす、数度の鏖をしたるといふ
ハ其押合てかゝる時の鏖はしめを一人にて毎度す
るをいふ、小返しの鏖幾度返合たるといふ也、一返し
の中にて相戦事五間六間追つ返つするは度数
にはセす、一返ししかへして相戦終り敵をおひ返し

其身も十間も廿間も引退つゝ亦敵のしたひ来る時取て返しふみこたへ鏑を合^ルる一度の数として其数を都合して幾度の鏑といふ也

野合城攻鎗心得の事

一 敵味かたたかひに田土にて備を立押合ての大合戦は其備々にて一・二の鏑有也、誰か手にてハ誰か一番鏑誰か二番鏑といふ、城攻の鏑も大手ハ大手、搦手と搦手と一・二の鏑を分るなり、大手にては誰か何番鏑、搦手にてハ誰何番鏑といふ、城中にても其分同前也、又かゝり合
数度

の合戦に毎度に鎧あらハ二度のかけ合にハ誰何番鎧と
三度めのかけ合には誰何番鎧といふ、一人にても毎度
の鎧をセハ何かしハ幾度の一番鎧幾度の二番鎧といふ、
初度には一番鎧にて後にハ二番鎧ならハ誰ハ初度合
戦には何番鎧、後のたひには何番鎧ハといふ、扱又一番
鎧ハ手前にて合に二番鎧ハ深入して敵の備の明筋江
鎧を入れて一番鎧と功を争とも一番ハ一番、二番ハ二番と
定のことくに分へし、子細ハ一番鎧の進むを見て社^(こそ)二番鎧
ハ進みたれ、たとへ敵の真中へ入こみ鎧を仕とも其志は
一番鎧におとれり、亦一番鎧ハ手前にて鎗合所ハ鈍とも

強鎧なり、其故ハ諸人の進ぬ所を抽て手初をする志ハ中々無比類事なるゆへなり、又一番鎧を合る兵か其場切になけ突にするか亦ハ鎧を切折れなとして刀をぬき二番鎧合時に鎧脇を詰たるハ一番鎧を合セ其上二番鎧の脇詰の太刀一場にて両度のかせきといふ也、鎧下の高名セは一番鎧を合、剩鎧(あまつさへ)下の高名遂といふ物也、如此の品を能吟味有て功を分(あやま)に謬りなく諸卒の恨を不請様に心得へし

一番鎧論の事

一 虎口場にのそミて味方の兵二人一番鎗を合せ二人なから
一番鎗と争に、其場一所にて立双て鎗合たらは其内ニ
備を走り出る所の早きを一番鎗といふ、若備を出る所
も鎗合も同前の時にてしかも同場ならハ大前に立を
一番鎗といふ、場所ちがひたらは敵の備の鋒へかゝるを一
番鎗とし備の端^{ソナイ}へかゝるを二番鎗とす、又道筋を行を
一番鎗とし道脇か又はははつれを行て合るを二番鎗と
いふ、或ハ亦左右をわけて左の手先にてハ誰か一番
鎗、右のて先にてハ誰一番鎗といふ、一備にても二人
の兵別々の組下ならハ何かしは誰の組の一番鎗、なにしハ

はんじやう何かしか組の一番鑓と分るなり、乍去これ
ハ一番鑓の二人論する時の心得のミ、本法にハ一番鑓ハ其そなへ
一陣の内に一人ならてなき法也、故如此二人ともに一番に
鑓をするをは一番二番を不分二人ハなから又は五人
有ハ五人ともに鑓を合するといふ法也、たとへハ此度何
国にても合戦に何の某何の何かし已上五人鑓を合
るといふ心持也

鎗場古例の事

一 惣て軍の習は一番鑓壱人進行鑓合ハ二番めは多
分惣かゝりに成物也、古より二番鑓有事先稀なり

故に三番鎗といふ事なし、惣て刃をましへすして崩争多し、よくくたかひに強敵にてなけれハともにふみこたへ鎗のあふ事ハなき物也、乍去味方のかゝりかねてしゆハする場にて敵強くこたへつゝ一番二番の鎗合ても勝負不付、味方ハ猶惣かゝりおそなハる時、三番といへとも二三人にて走出一番二番の鎗合て追つ追れつ相戦所へ鎗を打込ハ三番鎗といふ也、是も一番二番の兵つゝいて同勢を出離れ紛もなく鎗合を三番鎗といふもの也、於後一ツになり分なくハ鎗とハ不言、乍去左様の事ハなきことなり一番鎗さへ不合して其俣見崩にする事軍のたひ

事に在事なれハまして三番鎧迄こたへる事ハなきもの也、惣て古今ともに鎧の有事ハ百度に一度か二度かならてはなき物也、互に能々強敵にて真丸に立堅めて押むかひふみこたへる場にてなけれハ鎧はなし、或は見崩れ亦はむらかりかゝりする故也、去程に古より一番鎧をほむるは理りなり、但三番めの働は鎧といふ程の強みなきか、乍去強きてきにて崩かねる場ならハ三番めの働も鎧とめすへし也

犬鎧の事

一 凡鎗ににて鎗にてなき品十五ヶ条有、是を者鎗セり合ともまたハ犬鎗ともいふ、第一に敵間未遠く三町四丁有に味方の兵一人二人にても遠かゝりし敵の備へかゝり鎗にてたゝき合是を抜かけといふ也、品により法度に可行初二に已に押合て合戦はしまりて追つ返しつ爰かしこに打散て五人十人たゝきあふ事、第三に鎗場といふとも七八人より大勢すゝみ出鎗を入たゝきあふ事、第四にてきみかた押合セ戦時分備面に在る兵と皆たゝき合もの也、是を入込の鎗セり合といふ、鎗とハ不言也、第五に城責の時城

下江附或はさまごし又八門の地伏の下或ハ城の上より突合事、第六に敵の引退を追行に敵のふりもとり鎧にて払遁にするを合たる事、但てきの強者二三人にて大返しにかへし来る時味かたの真先に抜いておひゆく兵一二人にてふみこたへ合るハ鎗也、是を大返し請とめといふなり、是ハ大返し小返にてもなくたゝ弱者の敵に追詰らるゝを難儀してふり戻り鎧にて払遁にする事也、第七に一番鎗を合るといふとも敵に突かへされて二番の兵に渡し其身は引退事、但大敵故一旦は突た

てらるゝといふとも足なみには不遁返合くふりよく
払のきにしさりつゝ弐番鎗の兵を待付亦取て
戻し鎗を合るは鎗ト云也、第八に柵を隔たて幕
を隔て突あふ事、第九に鎗場にて働といふとも
馬上にて突あふ事、惣て馬上の鎗といふ事なし
第十に夜討夜廻の時敵と鼻合に出合て是非
におよはすたゝき合事、乍去夜中にても敵みか
た間を隔てゝ見付つゝ言を替し名のり懸てじりく
と押合る時其先蒐(かく)して鎗を入兵一人二人に不限
七八人にてても勝れ進むは一番二番を分鎗と定事

田中野合の作法に同前也、第十一に敵に手き
つく追詰られ已にセなかを突るゝゆへ是非にかな
ハす身の火払にふり戻り鎗にてたゝき合事
但敵間未遠時能塩あひを見切強者とも取て
返しふみこたへ逐(おい)来る敵を待請合るハ鎗なり、こ
れ社(こそ)鑑の根本といふ物也、こゝにいふは左にあらず
足行にて遁るとて背をつかるゝ故是非なくふ
り戻り鎗にて払(逃げ)にけにする事なり、第十二敵
味方退陳(陣)して其間いまた遠先かけする
足軽大将とも敵のかゝるを見て足軽をは打捨

自身下立て掛りつゝ突あふ事、勿論てきのかゝらさるに味方の足軽大将下立て己一身の働を志し敵へかゝりて我備より一町も二町も先にてたゝき合事、第十三にてき(敵)間遠き時に壱騎二騎にて物見に出、直に敵へかゝるか又先に居とまり敵のかゝり来るを待てみかたの先備ヨリ二町も三町も先にてたゝき合事、第十四にハ味方の物見抜かけの兵とも敵の斥候抜かけと出合先にてたゝき合事、第十五に合戦又はセり合の勝負始前方に敵味方の心懸ハ両陳(陣)の間へ出合、或ハ

矢軍し或者鎧にてたゞきあふ事、右十五ヶ条ハ
セり合の犬鎧と号して鎧とハ不言、右に記す
八ヶ条の鎧ハ古よりの良将定置給ふ所也、故に
其理至極して古今不易の律也

城乗の事

一 城乗は其かまへうすく堀浅き所を早く登ル
を手柄とす、左様の所には敵大勢防居故也
一番二番の次第は其手／＼にて可有、誰か手
にてハ誰か一番登たれ二番乗といふ、但一人真先

に乗を一番乗といふ、若真先といへとも二人あらは
一番乗とは不言、たゞ先乗といふ、先乗ハ五六人
七八人までを先乗といふ、少の遅速を不論一番乗
の一人につゞいて又壱人抜出て乗を二番乗と
いふ、但七八人まで二番乗とめす又一番乗して
鑑合たるといふハ堀口門口に不限其一番乗
の兵か先を先に攻入つゞ敵は二人三人有^{アル}とも門口
か道筋かいつれ要の吭^(のど)の所を堅防守り、備を
設居所へかの一番乗の兵か亦真先に攻入て
鑑を合るをいふ也、鑑を入るといへともは

つれの場ならで鑑とは不言、一番乗にて一番鑑ならハ其口の一番乗、則一番鑑といふ乗所は一番にて鎗合所ハ二人ともあらハ一番乗并鑑を合るといふ、乗込所は先のりにて鑑合る所は一番ならば何かしは其口の先乗并一番鑑をいたすといふ也、敵大勢有とも爰かしここに散居るか亦ハ道筋にても備も不設所へかゝり候鎗とハ不言、塀裏へ飛下則そこにたゝき合も鑑とはいわす、右にいふ通りに本まるへの道筋か亦ハ肝要のつまりを敵は一・二人

有とも備を設ふせき守る所へかゝり鎧を入を鎧
といふ也、^{ナリ}勿論諸軍に先立紛れなきを鎧といふ
一番鎗二番鎧の法野合の吟味に同前也、但一備
諸手に勝てはやくのらハ其手の一乗^レ番を惣手の
一番乗とす、若先乗の兵か二人共あらばつゝ兵ハ
二番乗と不言、惣して鎧も城のりも其一・二を□^{ハク}る
程にてハ細に一足の違をも吟味セねハ不^レ叶、それにて
ハ物の吟味セわしく成ゆへ古より一人先に進む
を一番とし二人とも進むをハ式^(番カ)は鎧といふ、城の
りを八只先乗といふ、船軍の法も同前也

乗込の事

一 敵中へ只一騎真先に馬を入乗崩を一陳(陣)といふ
つゝく兵ハ二騎三騎までを二陣といふ、それより
多はの里リこみといふ、若先に乗込といふとも二人
ともあらは只先陣と名付一陣とは不言、其法
鎧に同し、先陣に二騎とも乗込ハつゝく兵ハ
二陣と不言、一陣にハ二陣有、先陣にハ二陣なし
去程に是も敵間已に十七八間に引請て鎧も可有
ほとに近付時に乗込を一陣二陣先陣とは名付て賞翫

する也、敵間遠きときにのり込ハ抜かけといふ也
扱また川を渡スも一陣二陣の作法先陣一陣の
わかち右同前也、但馬上に鎗を持って突合たり
とも鎗とはいわす、一陣は一陣、先陣は先陣とは
かりいふ者也

鎗脇の太刀の事

一 かゝり口請止退口にかきらす鎗を合する兵
につゝき五人六人にてても刀を抜て鎗脇を詰刀
を添るを鎗脇の太刀といふ、況や鎗下へ飛込敵

を切払ハ大なるほまれなり、但鑓脇詰兵ハ多
して三人に不過物也、子細は大かた先鑓を持故
に刀にて進む者稀なり、若剛者なとか人に
先せられ二番鑓をハ嫌ひ鑓を捨刀にて飛入
か或ハ急成事にて人毎に持鑓不続ゆへに刀にて
かゝるか両条にいつれ不洩ゆへ鑓脇の太刀は
少もの也、若鑓合所へつゝく兵刀を持は鑓脇の
太刀といふ、鑓を持ハ二番鑓と心得へし、若真^(もし)
先へ二人進むに供に鑓を持ハいふに不及二人な
から鑓といふ、其内一人刀を持ハ鑓脇の太刀と

いふ、たとへハ真先に三人進むに其内に鎧持たるを鎧を合といふ、刀持有ハ鎧脇の太刀とし、弓有は鎧わきの弓といふ、但鎧もちたる兵刀持弓持の二人とかゝり口一同か又ハおそくハ只鎧といふ、一番鎧とは云さる也

鎧脇の弓の事

一 鎧合る兵につゝき弓を以てかゝりつゝ鎧脇に立敵の勢かゝる杉先を矢つきはやに射あらし鎧合る兵に刀を添るを鎧脇の弓といふ、但時に寄

鉄砲にて鎗わきを詰る事も有、鎗脇の弓鉄砲は幾人に不限也、さ言ても多くハまたなき者也、古より五人六人方多くハ不聞

鎗下の高名

一 鎗ワきを詰る兵にても亦ハあとより走りつきたる兵にても刀を抜て鎗合最中に飛込切ふせくみふせて鎗合下にて首を取を鎗下の高名といふ、但味方の鎗合る兵の鎗付たる是を鎗わきの兵討取とも同前に鎗下の

高名といふ、敵みかた少も不退勝負を決する最中
にて取難き首ゆへ賞禄する也、鑑下の高名も
三人四人在事も有亦老人もなき事も在へし、
但てきもみかたも惣手の先をかけ虎口へ出て鑑を
する程の剛者ともか只今を限と白刃をましへ死生
を一挙にきわめて攻戦場なれハ刀はかりにてふみ
込鑑下へくゝり入方に一ツもたすかる事ハなき者也
故に鑑下の高名ハ其志をほむるのみならず
其天運の強きをかんすへし

組討の高名の事

一 くみ討に其いろ六ツ有、第一にてき味方の剛者共
 鎧を合ると言とも勝負不決をせゐてたきり
 たる兵鎧を擡(搦)くゝり込て組か亦ハ鎧打折て
 飛込て引くみ鎧あわす最中に首を取を鎧場
 の組討といふ、鎧を仕剩鎧場のくみ討を致すと
 いふ者なり、第二に敵中へのり込馬上より組て
 落て高名一陣ならハ一陣先陣ならは先陣に
 乗込くみ討を仕といふ、其外ハ乗込てくみ討

を仕たりといふ、第三に太刀討して互に飛込て引くみての高名、第四に鎗脇の太刀武者にてもあ
とより走りつゝきたる兵にても鎗合最中に鎗下
ゑ飛込くみて伏しての高名、これをなつけて鎗下
の組討といふ、第五にたかひに物見に出つゝ寄合頭に
出逢ての組討、第六に我退口（際）□て取てかへし
ふみ止り逐ひ来ルてきと引くみて首を取事
是を退口の組討といふ、右六ヶ条の組討の内物
見のくみ討をは禁なり

場中之高名勝負之事

一 敵味方相對して合戦已にて始前方其間二町
三町へたゞりたる時両方より心かくる兵とも五人
十人真中へ出張、弓・鉄砲長刀等の(ママ)将道具を持
て出、追つかへしつせり合を場中の勝負と
いふ、そこに弓鉄砲にてうちたおし亦ハ突
ふせ切ふせ首を取を場中の高名といふ、扱其
者ともふみこたへにらみ合内にてき味方そ
なへを立寄次第／＼に近付互にしほ／＼と押着

そこにて鉄砲も納りつゝ、鎧はしまる物也、乍去軍は定なきものなれば、必定軍の度毎に如此の首尾有といふ事にてハなし、場中の勝負なくて鎧の有事も有へし、場中の勝負有て鎧なき事もあるへし、如此の品々をかんかへ其の心得有へし

崩涯の高名の事

一 とき味方已に鎧場に臨み、みかたの兵真先に進て鎧を合せんとかゝるといへとも敵こたへすとつと崩れる時、其兵直に走り付突ふせ首を取を崩涯

の高名といふ、てきこたへは何程強き鎧も可在といへとも敵こたへぬ故鎧合せすとも其志ハ同前なる故にこの高名ハ追討同前たるといへとも、真先に進み出る意地称美して其心さしの規模をあらハし崩涯の高名といふ

鎧場の高名の事

一 或ハかゝり口或は請止トメ亦は付入大返し小返しコの場にかきらす八ヶ条の鎧場におゐて鎧合る兵の其鎧合手を突ふセ鎧合最中に其首を取たるを

鎗場の高名といふ、其加勢幾千の手強き事是にひすへき高名なしといへとも千度に一度もなきこと也、かゝる時の鎗場ならハ懸り口の鎗場の高名請とめならハ請止の鎗場、小返し大返しならハ其品々の鎗場一番鎗場ならハ一番鎗場といふ、証文にはたとへはそこニ而鎗をあわせ鎗場の高名を遂といふ也、凡其品三有り、第一に鎗をあわすといへとも或は鎗打折亦ハ短気なり兵にてセいて鎗を捨刀を抜て飛こみ敵を切崩すを鎗場の太刀討といふ、其場にて則切ふセ組伏首ヲ取を鎗場太刀討の高名亦

ハ鎧場くみ討の高名といふ、第二向の相手を鎧付ふミ
こみての高名、第三にたとへハ二人立ならひて鎧合に
老人の兵の鎧付たる首を今一人の兵か鎧をすて
飛込て取事、是は人の鎧付たるを取は鎧下の高
名に似たれとも鎧場の高名といふ事ハ己鎧をせずし
て人の鎧付たる首を取は鎧下なれとも己も鎧を
合たる上なるゆへ如此右三段の高名何も鎧合最
中勝負未決中に其場にての高名を鎧場の高
名といふ、或ハ問て言鎧を合て突伏其場にて
高名は不成物也、十か十なから討死するゆへに

助かるハ稀也、去程に鎗を合向の相手を突ふセ其
場にて高名のしらるゝ程の場は鎗と可言理りなし
子細は鎗といふは何もけハしき場にてなか／＼高名
不成物也、即答て曰、勿論其理一往有といへとも
かたつまりたる吟味なり、敵みかたの剛の者共互に
己か備を抽て相かゝりして鎗をあわする時敵の
鎗よりみかたの鎗大せひにて然も敵みかたの惣懸
りおそき時は味方に助手多くてき助手になきゆへ
如此の場にてハ必鎗を合其場にても高名成もの
なり、乍去それハ稀なること也、鎗場にてハ手前け

ハしく鎗を突に隙なきゆへ、たとへ突伏ても鎗をなけて飛込首を取事は難成物也、若首をとれば己か身を突るゝゆへ其所迄は貪着なくたゝ身の火を払にかゝり居故此高名ハ稀なり、敵の鎗よりみかたの鎗多てきのつく／＼惣かゝりおそく彼是の仕合調かねは鎗場の高名は不成物也、勿論一番鎗を合る兵の鎗場の高名をする事も有へし、たとへ鎗場にて突ふセたりとも敵こたゑす崩行は其高名ハ逐討同前也、てき味方の鎗合最中勝負未決の間互につかへ戦内の高名を鎗

場とハいふなり、右にいふ鎗下の高名も同じ心也、若
鎗を合時てきより合手も合セ不出、直に敵備え
鎗を入亦ハ敵の鎗は味方より多しかれとも敵の惣かゝり
つゝく場ならハ一人して四人五人を合手としたゝかふ
物也、故にたとへ一人合手を鎗付ても残りの敵有て
鎗場の高名は不成者なり、若すくれたる兵ニ而
ふみ込て高名するとも敵の鎗さきなれば千に
一ツも不可助、去程に鎗場鎗下二ヶ条の高名はそ
の強みたぐひなきもの也

退口の高名の事

一 味方退口の時ふみこたへ敵の抽て逐来兵と勝負して首を取を退口の高名といふ也、况退口混乱する中にて味方手負死人を引かけて退、剩其当のてきを討て高名せは甚以強き働なり、か様の事をこそ誉とはいふ也、右退口の高名は崩れ口の高名共いふ也

各将の軍に無鎗事

一 名大将と名大将との合戦には上下かけ引たる

みなく一同するゆへに詰る鎗はなき者也、鎗有とも
最初鎗二三人にて二番目ハ惣かゝりなる者也

侍上下次第の事

一 凡功有侍をよふに其名六ツ有、第一に或は初陳(陣)の
若者一・二度のセり合にも出、剛者の鎗をする後を
もくろめ、亦ハ朝待夜討かまりの時ふりよく手
をふさき、或は大合戦の時も追首といへとも早と
り、亦は退口にも人なみより跡にのくをハ心操と
名つけて是を利口者といふ、第二に其心はセ

二・三度に及其上鎗脇の働一兩度も在を名付
てかい／＼しき者といふ、第三に働にき見よく強
みはさのミなけれとも度毎に手に合逐首と
いへとも早く取夜待朝込にも人先に首数を取
よりを不切手をふさけるを用にたりとも亦ハ物
仕ともいふ、第四にかい／＼敷事四度五度に余り
鎗下の高名脇詰くみうち太刀討或ハ一番乗り
亦ハ鎗を合、ヶ様の事八九度にも及を覚の者
といふ、第五場(場数)かすなくとも働程の所手強き事
のみ有を剛者といふ、是に場かすあらハ剛の兵迎

おほゑの者ともいふ、第六に少身たりといへとも其氣
せうよのつねならず軍の始終盛衰を察し戦
て利有間鋪には大将を諫め止、可勝因を見請
てハ惣軍を諫め、抜かけを押へ後るゝ者を励し前
後左右を下知し惣軍を一同させ其身真先に
鎗をあわせ大軍をなひけ長追するをハ制し
止め已後殿し堅固に味方を引取こたへ難きを
ふみこたへ惣軍の危を助け或は味方の敵に
くひ留られ引取かぬる時は両軍の間へ乗込
堅固に人数を引あげ、弓箭の吟味を能

せんさくして万事のかなめをかせき、或ハみか
たの退後れたるを助手負死人をかけたの
き、のき口には防矢射或ハ返し合て鎗をあ
わセ大敵を逐かへし場数は少くとも非太刀の不
入働を専とし物毎大様にして小事にかゝハラ
す大軍を引廻すへき器量有を大剛の
武士といふなり、如此の士を物すに任し権柄を
さつけ人数を預へし、たとへ一身の働は千
度有とも其こころさしハ少く意地にかさ
なき士をは古より匹夫の勇と号して必将吏

の官に不任と見へたり、城責野合の合戦に不
限せりあい足輕の場にてても必かさ有侍は勝れ
て見ゆる物也、一度の鎗を誉も鋒へ抽る意
地を以て也、殊に大合戦にも敵味方六七人
の鎗を合る勝負に両軍一万二万の勝負成故
鎗をする鎗ハ先剛にして軍の相色をよく見
知らねハ不叶故、かさなき士は不叶事なり
是を以て少身にても本の兵一番鎗・二番鎗強
敵ならハ三番鎗も誉ならん、惣しててき間二十
間三十間一町の内外勝負の始る少し前善悪

八間見ゆる物なり、子細ハ弓鉄砲のせり合最中の事は二十間三十間の間なるゆへ矢鉄砲のふるほと来つゝ手負死人しやうき倒しに重る場にて抽る侍は一番鎗の棟梁たるへし、一度の鎗を誉も人のすゝみ得ぬ所を抽る意地を以てか様の士に智謀有をこそ大剛の兵一人当千ともいふへけれ、殊に城攻野合の戦に不限千二千の一備の中より二人三人勝てふり見事にこたへるハ一度にても覚の侍剛の武士といふへけれ、故に退時にもかゝる時にも千万人に抽る人ハ英雄

と号して侍の棟梁たり、たとへ鎗を不合とも首ハ
不取とも其身に徳そなハリ人をなつけ士卒を
愛し忠義を元とし只中に有て大軍を
扱ひ軍の得失を察し謀をたくらみにし
大敵の威をくたき刃に血をつけすして凶徒を万
里の外に屈るを大勇の侍と号して人傑とほ
めたり、弓矢の長者武道の守護神ともいふ也
誠策を帷幄の中に運し勝ことを千里の
外に決と高祖の張良をほめ給ふは是也、惣而一国
の大將の武功有をハ勇將とも弓取ともいふ、其

上強き働有をは剛将と名付て其大将に仁徳
智謀有を名大将といふ也、一郡一城の士大将の
如此なるをハ武辺者亦ハ大剛の士大将といふ、乍去
これは主君有人の事也、主君さへなくは一郡一城
の主といふとも是を名大将といふ者也、只右にいふ
通にかりそめにも大勇なる侍を取立る事
肝要なり、韓信か胯下をくゝりしも大剛とほ
むるも是なるへし

鎗并脇詰太刀鎗下の高名の事

一 大勇の取は天下の大切なれハ不及論一身の働の内には鎗を第一とする、子細は敵味方数万の軍兵を卒し死生をきわめ押合る鋒にての事なれば万死一生の手柄也、殊に一番鎗などハたゞ一人なれば若相手不出合して待うけたる大敵の鎗前へかゝりてハ千に一も助は稀なり去ハ一度の一番鎗を自余のかせき十度にも勝ると誉ハ理りなり、但鎗場の太刀などハ鎗をする人より先へ踏込てきを切払、亦は鎗を切折なんとするハ鎗より強るなれとも鎗を

あわする羽かいの下のかせきなれハ鎗より芬(ふん)所也
尚以鎗下の高名も鎗合る最中に鎗下へ飛
込ての高名なれば是も鎗より勝(る)かなれとも是
も鎗をたよりつゝ其下にての働きなれハ是
以鎗に芬り、一番鎗合る兵ハ云におよハす鎗ワ
きの太刀も鎗下の高名も十に九ツ討死する歟
深手を負かいつれたすかるは稀なり、三州の下
この諺にいふハ惣して針武辺と糸武辺と二
ヶ条在り鎗を合人先を致は針武邊其外
ハ糸武辺也、針の通りたる跡ハ糸ハ通り安(易)故

其諺如此鎗につゝき鎗下の高名を誉も惣手の先をかけ開を抜鎗につゝき地煙をふみたて攻戦最中に一心におもひ切刀を抜てふみ込む意地を以也、惣て鎗の合事は敵味方互に強してふみこたへねハなき者也、かるかゆへに鎗合時ハ互に刀足を出し踏たつる煙にて二間先はハ不見物也、其上無性に成て敵の具足善物の色亦ハいつくにて何と有も不覚朧月夜のことくたゝ夢を見る様成者也、但我よりさきへ抽る人ハ能覚留物也、故に勝れたる働

には証人不入といふハ諸人に先立ゆへ惣軍の目にかゝるを以也、亦後陣にて先手を見るに敵味方いまた推合さる内ハ互に地煙うすく(二筋)二すしに分つて境を隔てゝ天江のほる物也、已に鎗合時ハ二筋の地煙一ツになりいかにも厚く地にうつまいて天江立のほらす鉄砲の音も静りゑいとう声と鎗のはためく音はかりかすかに聞ゆる物也、是を以先手にて合戦初と知なり、さて鎗をする時はかぶとをかたむけ無性になりた(只)ゑいとうといふ計を力とし左右

の事も不知、敵の色相も不覺、齒も不合程ふるい付胸セき上只朧月夜に知らぬ道を通りたることくなる物也、惣して鑓場の崩れやすくこたへ難き事ハたひ／＼の鎗に逢たる兵にてなくハ其けつむしき事をは不可知、鎗下か鑓場か組討かの首ならハ歩行走の首にても高名といふ、子細ハ鎗場に出る程の士は強者にてなけれハ不出ゆへにたとへ葉武者にても其こゝろさしハ葉武者にあらさるゆへに如此いふ也、いかに大将の首にてもにぐる所を追討に取ハさの

み高名とハ不言、乍去一手の物頭を討ハ冥加を
感して是亦誉なり、惣して冑首とて上方衆
のいふ事也、これハ古よりなき事なれハ関東にて
終に不聞、何者の首にてもあれ鎗場か鑓下かい
つれけハしき場にて取難を取を高名といふ
也、すべて本朝の弓矢ハ明応文亀の頃より
悉く取矢武道の格左前に成下り、冷首を取
ても高名とよひ、またハ本の兵の鎗を合する
羽がひの下にてはつれの首尾を合ても一本の鎗
のことく自慢し鎗セリ合をも鎗と心得武道

の吟味を不知只敵を突ころし首さへ沢山にとれ
ハ皆手柄なりと思ふと見えたり、つくくくと当士の
風をみるに猿のことくなり、小賢き侍の弁舌
能少しの首尾をもことくしくいゝ廻り作法
も吟味も不知只口先にて触廻る侍のしかも合
戦敗軍の時ハ人先にはつし主寄親の討るゝを
も顧す裸に成てにけ延(恥)はちも義理も不知
者ともをも吟味なしに抱置、物の頭と成人數
をあつくる事多し、殊更左様に義理も恥も不
弁きおひ口には追討の首にても多く拾とり

もぎ付の高名整付のなんとか自慢し後れ口にハ
主寄親を討せて生てかへりても恥とも不思人先
ににけのび他国へ行てハ武勇者に成り互ににけ
延て助たる傍輩を古の武辺の証人に立あい
て成立者多しとみへたり、殊にまけ軍にて主
組頭の討死する上は能兵ハ皆義を守りて討
死し生残る者共ハ件(くだん)の恥も吟味も不知公儀
弁舌を本とし物前の首尾逆も人の取たる
首を拾ひ亦ハ奪取人を助けても相討といふ猿
賢き人ともなれハ偽ハ多く実ハ少しと見へたる

凡侍ハ首は不取とも手柄ハせすとも事の難に至
て不退、主君と枕を並て討死を遂忠節を守る
兵を指て侍とは申なり、たとへ万々の手から
有とも義理恥を不知輩ハものゝ吟味をせさる
ゆへ幾度の首尾有逆も一つも床敷ハ不信心にて心
をみかき我十分に強ミとおもわぬ手柄をハ脇
より誉とも手からとせす義ヲ守り忠を守と
するハ一度の手からも奥深くおもふなり、我幼少
の時分侍の風儀を見るに物毎大様にして肝
要のかせきを専とし三度四度の鎗をしたる兵も

亦大軍を指引して塵を取て勝を得たる侍大将も其功におこらす、かりそめにも我身の誉を不言、只義理をのみ専とし兵尽矢窮てついに敵に不降忠義とともに死を決せしゆへたとへハ九淵の塵になきを見るかことく奥深く有へし、次初(次第九)ニ世下り俗美ならず皆利発名聞に走り忠義忠節の志かり初にも不在とみへたり、人大禄を以招く時ハ譜代の主君を捨二君に仕る輩甚多し某写本ノ通尸心は物にふれて移り安きものなれハかり初にも侍道の外を不可見聞朝夕身をならハし

馬に乗弓を射鎗をつかひ太刀を打学問するとも
忠義大切を聞武功有者を集軍法の謀を聞な
らひ士卒をなつけ民を屋する道を憤り一度
冑の緒をしめ鑓長刀を提け天下の難儀を
救と志す所士の役也、兎角侍ハ忠義信の三を
以貴事なれハたとへ主君より如可様の悪き振廻
をしら恨に思ふとも必謀反亦ハ他国へ走余の
主君に仕へへからず、是非堪忍なり難くハ主の馬
の前にて忠死を致へし、次に我身常の行ひも
詩歌文学茶湯等の花奢風流をかり初にも不可

好只二六時中に弓馬を嗜智仁勇の士を招き
あつめ大功を励ますへき物也、仮初にも花奢なる
事と利発とを不可見聞必手ぬるく成て死所
にて得不死者也、侍ハ侍の格あり、然に他事を
好み侍道を取失ひ武道を脇へなし茶の湯
歌道公儀弁舌のみを専としてぬるき事を
好むやつはらをは時刻をめくらさす頭を
可^(はねる)勿物也、右開卷より退口高名迄注取皆古法
を以書置物なり、他は不知信玄謙信の両家ヲ
始猛き弓矢の家中扱ハ御当家の軍法是也

必々他事を好武道を不可取矢近代の侍の作法
次第／＼に利発に走り仮初にも金銀米錢の物語
し若武道の咄しする者をは見たくない咄な
とく狂人のことく云成すと見得たり、浅ましき
末の世かなと涙ナミダを流事多し、皆侍も地下町人
のことく成事も末の世の印と覚るなり、世と同
しく有とも士の格を立へし、蓮ハ沼中に生
してもあいてけがれすといふ事有ハたゝ義を
重し死を善道に守り人馬嗜天下の治乱
を以一身にかけ只明ても暮ても一心に君のため

天下の為に鎗長刀を取て死なんと
のミ可憤
申者なり、仍如件

九月九日

同平八郎藤原忠勝

本多美濃守との

同出雲守との

家老中江参